

NHK会長 前田 晃伸 様  
NHK副会長・放送総局長 正籬 聡 様  
NHK専務理事・「BS1 スペシャル調査チーム」責任者 松坂 千尋 様  
NHK専務理事・大阪放送局長 角 英夫 様

## 踏み込んだ調査と納得できる説明で視聴者の信頼回復を

～BS1 スペシャル虚偽字幕問題に対して～

2022年2月7日 NHKとメディアの今を考える会  
NHKとメディアを語ろう・福島  
放送を語る会

NHKは、昨年12月26日放送のBS1スペシャル「河瀬直美が見つめた東京五輪」で、五輪公式記録映画製作チームの映画監督・島田角栄氏が取材対象の男性にインタビューするシーンに「五輪反対デモに参加しているという男性」、「実はお金をもらって動員されていると打ち明けた」という字幕をつけて放送しました。

この字幕について角英夫専務理事・大阪放送局長は1月12日に経営委員会で、「一部に不確かな内容があった」とお詫びしました。そのうえで「制作担当者は、取材の後、男性が五輪反対デモに参加したと思い込んで事実関係の確認が不十分なまま、不確かな内容の字幕をつけて放送してしまいました」「事実の確認とチェック体制が不十分だったことが原因です」と説明しています。13日の記者会見でも同様の説明を行いました。

五輪反対運動に取り組んできた市民団体は、「デモ参加者にお金を払うなどありえない」「字幕は事実と反し、市民運動を貶めるものだ」と抗議の声を上げました。字幕情報が「不確か」であったことを認めたNHKの謝罪は、市民団体のこうした主張の正しさを裏付けるものと理解されます。

今回の問題で、制作担当者も試写に立ち会った管理者も、「デモにお金をもらって参加している」という字幕を付けることに違和感を覚え、事実関係を厳正に確認する必要性を軽視したのは、番組制作現場に、「デモは、金をもらって動員される『プロ市民』の行動」という考え方、五輪に反対する市民への偏見があるのではないかと疑わせます。

また同番組中では、「プロの反対側もいてるし」という島田監督の発言も挿入されています。島田監督によれば、問題の男性は島田氏が取材中に探し出し、インタビューを設定したとのこと。島田氏が何を根拠に「プロの反対側」なる言葉を用いたのか、この島田氏の市民運動に対する歪んだ見方と男性へのインタビュー設定、虚偽字幕とは関係があったのか、NHKは何を裏付けとして島田氏のこのインタビューを敢えて入れ込んだのか、

字幕のチェックの「甘さ」にとどまらない根深い背景を憶測させます。

番組には、河瀬監督がデモの現場に立ち会っているカットは登場しますが、デモの参加者・主催者へのインタビューはありません。字幕や島田監督のインタビューについても、デモを企画した市民団体は「NHKからの取材・確認は一切なかった」と言明しています。「金でデモ動員」という重大な問題について当事者に事実関係や見解を確認しないのは、取材・報道の基本を蔑ろにする、あってはならないことであり、放送法第四条の三「報道は事実を曲げないですること」、あるいは「意見が対立している公共の問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにし、公平に取り扱う」とした国内番組基準にも大きく違反しています。

さらに、記者会見でも河瀬、島田両監督や視聴者にはお詫びしたものの、偏見を流布されもっとも傷つけられた五輪反対運動の人々への直接の謝罪はありませんでした。また「不確か」という説明は、「確認できないだけで、男性は本当に反五輪デモに金をもらって参加していたかもしれない」という含みを残しており、「事実無根」を正面から認めたものとは言えません。このようにNHKの対応は、「市民の反対運動を極力無視・否定する」姿勢に貫かれています。

1月24日、NHKはこの問題で「BS1スペシャル調査チーム」を設置したと発表しました。

私たちは、調査チームに対し以下のように要望します。

1. 調査チームには、通り一遍の事実経過の調査や原因分析で終わらせることなく、
  - ・制作者が十分な事実確認も行わないまま字幕を付けた「思い込み」の原因は何か
  - ・「思い込み」は映画製作チームにも共有されていたのか
  - ・管理者が試写で、強く事実確認を求めなかったのはなぜか
  - ・担当ディレクターが、上司の指示を受けながら、男性本人や島田監督に字幕の確認をしなかったのは事実か、だとすればそれはなぜだったのか
  - ・「プロの反対側」という島田監督のインタビューはなぜノーチェックで使われたのか
  - ・なぜ反対運動の側に一度もきちんとした取材・確認をしなかったのかなど、踏み込んだ調査で視聴者の疑問に応え、視聴者に納得のいく報告を行うことを求めます。
2. 調査チームには第三者を加え、視聴者から「身びいき」「真相隠蔽」との疑義を持たれないよう、公平性・公開性を担保したメンバー構成を求めます。
3. 事実経過と汲み取るべき教訓、再発防止策を視聴者に丁寧に説明する、検証番組を制作することを求めます。

以上